

# 「ニーチェ小説」としての R. ムージル: 『特性のない男』

R. Musils >Der Mann ohne Eigenschaften< --- ein 'Nietzscheroman'

米 沢 充

(一)

1978年に A. フリーゼが、旧版を原典校訂に基づきさらに300ページ余りの遺稿部分を追加して出版した『特性のない男』の新版は、この現代的な小説の読みを一段と複雑にしたと言えるが、その一方ではこの小説が新たな読み方を求めるものであることを意味することになった、とまで言ってもよかろう。膨大で錯綜した遺稿部分を含む新版をもってクラウディオ・マグリスは、『『特性のない男』は今日初めて読むことのできるテキストとなった。』という判断を下している<sup>1)</sup>。また別の論者は、「ムージルに逆らって読むことが、ムージルに即応することである。」という逆説を提案した<sup>2)</sup>。これらは、或る意味で旧版によった読みの修正を求めるのであり、さらには否定さえしようとすると言ってよい。例えば、1970年に出版された H. アルンツェンが『戯画的文体』というタイトルの著書で主張している、この小説全体を戯画 Satire、とりわけ時代戯画 Zeitsatire として読むものである<sup>3)</sup>。そのようにこの小説が、人間の心理と行動のたぐい稀なアフォリズム的考察と、とりわけ20世紀初頭のオーストリア・ハンガリー二重帝国の帝都ウィーンに展開する時代戯画に溢れた作品として痛快に読めるのは言を俟たない。ここには、当時手に入る有りとあらゆる文体が使用され、誇張法、矛盾語法、逆説、暗示的引用、黙説などの種々のレトリックが冷静な視点から駆使されている。作者ムージルがこのような文体・レトリックを獲得したのはニーチェ読書に拠るところ多いと見ることができる。とはいえ確かにムージルは、「構成的イロニー」を自分の創作原理としているが、この作品に Satire だけを見るのはやはり一面的に過ぎるのである。

旧来の読みとしてはさらにまた、カイザー／ウィルキンスのように主人公が自己疎外を克服して魂の救済の求める物語と考えるものであったり、あるいは、主人公ウルリヒそして作者ムージルの「思考実験」の水平で読み解くというものであったりした。それらは、多方向に拡散し、多義的な「開いた」読みを要

求するテキストである、あるいは複数性を作り出しているテキストであるというこの小説の特質をただしく捉えていないとしなくてはならない。

「拘束なく自由で、関連性を持たず、散乱した主体たちの多数性」(マグリス)を抱え込む現代的なムージルの小説は、一つには、文学作品のテキスト性、模造性・シミュラクル性を読むテキスト理論(R.バルトラ)に依拠することによって、他方では、「ニーチェの思惟の中心」を他の作家がなしえなかったほどに捉えているとB.ヒレブラントの言う、この作品のラジカルな内容面を考えることによって、「読むことができる」ようになるのである。とりわけ、現代のフランス思想(J.デリダ、M.フーコー、G.ドゥルーズら)が、ハイデッガー経由でニーチェ理解の新局面を切り開いた理論の援用が必要になってくる。先ほど引用したC.マグリスは、「不定形 amorph で、絶えまない不連続な解釈と無数のパースペクティヴの戯れ、ニーチェの言う意味での解釈自体の独立した運動」が作り出すテキストであるからだという、極めてラジカルな考え方を表明している。マグリスは続けて「無限の文書 Schrift の中に溶け入り消滅してしまった生」というアスペクトを切り出しているが、この観方は、ムージル文学の性格づけとしていわば「文書性」「文学性」という方向をとる、解釈の或る流派の主張の中に置いてみれば理解しうる見解である。彼がフーコーの名に言及していることは、フランス現代思想からのニーチェ理解と、そこからのムージル文学解明を示唆していると見てよい。

ムージルはほとんど生涯にわたって、まさに死去する当日に至るまで畢生の作品『特性のない男』に取り組んでいたが、晩年のある時に、結局は解決を見出しえないままに未完に終わることになるこの作品を「失われた重大な発言」と書きとめている。「失われてしまった」というのは、一つにはムージルにとっては、世間の人が「失った」ないし「無視してしまった」という意味であったろうし、もう一つには彼自身が、或る何かを捉え損ねてしまって、言語による表現へ齎らしえなかった、いわば「空白」として意識していたということの表明であるかも知れない。この場合、作品『特性のない男』は、空白を多数抱え込んだ「欠陥」のある作品だということになるとともに、恐らくこのような作品はいわば「空白」を読むという読み方を課題として内包することで成り立つことのできる現代的なテキスト、現代的小説の一つの本質的な正確を言い表している、と理解できるとしてよかろう。無論そこまで言い切ってしまうのは躊躇われるが、「空白」とか「空所」Leerstellenを多数抱えた、フラグメンタリーリッシュな、あるいはエッセイ的な、ニーチェ風に言うとアフォリズム的な性

格の小説であることはひとまず言えるだろう。

体系の形式を拒むアフォーリズムは、ハイデッガーのニーチェ解釈に異を唱え、ニーチェにおいて「歴史が哲学の唯一の内容になった」というテーゼを立てたゲオルク・ピヒトにならえば、「個体と無限なものとの関係の直接性が示される文学形式」であり、アフォーリズムへの転回が「ニーチェ哲学の内奥の本質に属して」いるのである<sup>9)</sup>。論理の秩序ではなく、真実の秩序を叙述するこのアフォーリズムという文学形式は、またムージルのそれであるとも言ってよいだろう。そしてさらに言えば、この小説をあの「ウィルソンの霧箱」のようにイメージするならば、ムージルとニーチェの関係というテーマ自体も多くは「空白」・「空所」のままであって、外からは窺い知れないその箱の中で $\alpha$ 線だか $\gamma$ 線だかの飛んだ軌跡、徴標 Zeichen が、両者の繋がりを、通常理解とは異なった有りようで、ほとんど事後的に、つまり、断片的という在り方ながら文学作品として成立した後という意味で事後的に、示している、とでもいったイメージが、両者の関係というテーマの一面に潜んでいるという言い方ができるのではないか。それは、一方での、何らかの理論による整合的な歴史把握に抗しての、中心を持つことなく拡散している現代という時代を捉える歴史認識と、他方での失われた発言の書き方としての、「空白」や「空所」を抱え込んだままの、複数の主体の場所をもつテキストとが相携えて現出してくるというように考えることを意味する。

## (二)

すでにニーチェの名が出てきたように、作品『特性のない男』は、またムージルの著作全体は、大きな概念装置から細々とした語句にいたるまで、極端に言えば、ニーチェ著作からの引用、借用、応用に満ち満ちていると言って過言ではない。ニーチェはムージルにとって巨大な汲み尽くせない武器庫の観すらある。そもそも『特性のない男』という「特性のなさ」とは、一つにはニーチェの診断した時代病---デカダンス---、つまり全体というものの無さ、中心の欠如、主体・自我の欠落ないし消失を指すとともに、把えどころなく変容してゆく現実に対して、いわば仮説的に、多面的に、脱中心的に対処して認識を常に新たに深めてゆこうという態度---ないし態度の留保---、また、ニーチェのいう「自由なる精神」freier Geist の概念のもとに解することができるであろう。何らかの有りうる・可能的な肯定を探り当てるための否定 Negativität という立場、小説の主人公ウルリヒは、「人間中心主義的行動の解体」(ムージル)の状

況に直面して、彼なりのやり方で「マイナス変種」Minusvariantenを数え上げつつ、そこから何が現れてくるかを認識せんとして眼差しを据える人物である。

この『特性のない男』に「一つのニーチェ小説」という名を与えようとしたのは、1978年に『ニーチェとドイツ文学』というニーチェ受容のテーマで論集を編集したブルーノ・ヒレブラントで、総論中の数ページのムージル論においてのことであったが、その理由づけとしてヒレブラントは、「ウルリヒの精神的企図にはどれも潜在的に常にニーチェが存在している」ことと、ムージルの関心が、『ファウストゥス博士』を書いたTh. マンの心理学中心にくらべて、「生の意味の拡大、新措定ということでの生の上昇という形而上学的アスペクトにある」こととを挙げている<sup>6)</sup>。しかし、小説に即して詳述されていないので、果たして「ニーチェ小説」という呼称がいかなる意味に於いて適切性を持つのかはなお考察されねばなるまい。無論のこと、ムージル自身「ニーチェ小説」を意図したわけではないし、このような呼称をを使ったのは、後にも先にもヒレブラントのみであるから、研究史において定着した概念でももとよりない。

「ニーチェ小説」という呼び名を考えると最も主要な人物は、言うまでもなく、ニーチェにドイツ精神の、ドイツ文化の、ドイツ史のデモーニッシュな具現を見るとともに、翻って第二次世界大戦後にはいち早く全世界に向ってニーチェを啓蒙主義精神の象徴として擁護したトーマス・マンであり、もう一人は、ニーチェの中に、ヨーロッパの文化を解体させるニヒリズムに抗してひたすら芸術による救済を、芸術の形式Formという最終的解答を見い出そうとしたゴットフリート・ベンである。ベンは、価値の解体のニヒリズムが蔓延する時代状況を「ニーチェ状況」と呼んだが、それはムージルが文学活動を開始した若き日の精神状況でもあった。これら三者に共通のテーマを論じるのはここでの課題ではないが、一つの「ニーチェ小説」を書いたとされるムージルのニーチェ受容の本質的なところはどこにあるのかを問うとき、この二人の作家を参照すべきであることは論を俟たない。

ムージルにおけるニーチェ受容というテーマをいち早く取り上げ、かなり徹底的に且つ断定的に論じたのは、インゴ・ザイドラーで、今から既に35年前の1965年に発表した「ローベルト・ムージルのニーチェ像」という論文においてであった<sup>7)</sup>。それは、大変コンパクトに整理整頓されたオーソドックスな論考となっている。ザイドラーは、最終的にはニーチェの意味での徹底した「拒否」

はムージルには無く、ムージルは最後には「諦念」Resignationが「無力」Ohnmachtが残った、とかなり突き放した態度の結論を下している。それでもザイドラーは、それまでのムージル研究を批判して、ニーチェ思想を戯画的に体現しているクラリッセではなく、ウルリヒが中心であって、ウルリヒこそが「世界のニーチェ的な異質性」(ムージル)を生きるのであること、ムージルのニーチェ理解が当時の潮流的な水準をはるかに抜けて、より正確で、精密で、より深いものであることを論じている。彼は、なるほどムージルの本領とするところは思想的新局面ではなく、文学的形にありとしながらも、この短い論文ではそれを示唆するに留めている。そこに言う文学的形とは何であるかを作品に即して問わなければならないし、前述のごとく、『特性のない男』新版の迷路にも似た遺稿部分を含めて問わねばならないのである。

その点テオ・マイヤーが、クラリッセをニーチェ礼讃とニーチェパロディーを体現する人物としながらも、彼女のモデルとなったアリス・ドーナットの狂気じみた滑稽さの中にもニーチェと同様の真剣さ Ernst を見て取って日記に記しているムージルの言葉を引きとって、「実存的な問題を身の内に耐えている真剣な人物」としているのは、ザイドラーよりも一層ムージルの文学に近づいていると言える<sup>9)</sup>。そして彼はその未決的に開いたアンビヴァレントな文体、アフォリスティックな書き方によって来る淵源にニーチェを置くのである。マイヤーは、ニーチェ--クラリッセ--モースブルッガーの三幅対に、犯罪と狂気と芸術家という近代の切り離しがたい問題圏を指摘して、ムージル文学の特質の一端を考えている。他方では、ムージルにとってニーチェは総体的には潜在可能なものの思索家として重要であり、ムージルが批判的・啓蒙的ニーチェを視野から外すことはない点も押さえている。

かくしてムージルとニーチェとを結ぶ種々のテーマ圏が浮上してきた。主体と認識の問題、存在論、倫理問題、身体論、言語観、表現法、芸術などなどである。これらのどれをとっても簡単には論じがたく論者の力に余るものであるし、限られた紙面ということからも十全には扱えないものばかりである。そこで一つの切り口を作るという意味で、両者に共通するものとして「夢」のテーマを取り上げてみることにする。

### (三)

まず、ムージルに於いて「夢」に関する目覚ましいアスペクトを4つ紹介しておこう。一つは、倫理 Ethik の、つまり人間の生き方の、新しい根拠を見い

出したいと考える主人公ウルリヒは、人間の精神に正確さ Genauigkeit と魂 Seele という二つに分裂した領域があると見なし、両者の一種の統合 Synthese を探す道に乗り出す人物と、ひとまずは纏めておいてよかろう。この二つの領域はムージルが生涯にわたって取り組んだ問題圏であって、その時々で「暴力と愛」、「理性的 ratioïd と非理性的 nicht-ratioïd」あるいはまた「明証 Eindeutigkeit と類比 Analogie」という対の概念で言い換えてもいる。前者は、知や論理、科学や合理主義の領域であり、後者の領域であるアナロジーは、宗教感情や倫理、文学（詩）、芸術、そして「夢」の中で働いている、精神の一作用形式とされる。アナロジーや比喩 Metapher/Gleichnis によってしか了解されえない人間精神の現象に目を向けるということの意味する。即ち「夢」がもつ、超論理的で統合的な認識方法が積極的に捉えられようとしていると考えてよかろう。ムージルは「夢」のもつ論理を小説の中で「魂の滑り行く論理」と呼んでいるが、ここでいう「魂」Seele という言葉こそ、ムージルが多角的に照射しようとし、心的身体的なすべての現象を閲覧し、言語的に捉え、また小説という包括性のある文学様式を用いて表現してゆく際の核となるキーワードと見なしてよいものである。

「夢」に関するアスペクトの二つめは、『特性のない男』の隠された第二の主人公ともいうべき、次第に狂気の中へ陥ってゆく女性、クラリッセが体现する「生の夢のごとき側面」として表現されている、通常理性では捉えがたい領域である「夢」がある。これは第一のものの延長線上にあるが、謎的な性格、常軌を逸した点において見られている。クラリッセとは、前述のように、半ば戯画的なニーチェ信奉者として描かれている。

そして三つめは、主人公ウルリヒが、そこに善と悪との存在論的な逆転・倒錯を予感して甚だしい関心を差し向けることになる人物、性的な女性殺害者モースブルッガーにかかわるものである。ウルリヒは「もし人類が全体として夢見ることがあるとすれば、モースブルッガーが現れるに違いない」と考えて、ひとかたならぬ知的興奮を覚える。こういった思考の上での接続法第2式は、ウルリヒのいわゆる「可能性感覚」が作動して、現実の持つ諸前提を疑問に付すとともに、現実が機能している表面を超え出ようと探りを入れる思考実験の顕著な一例である。そのようにしてウルリヒは現代の人間存在の歪みからの脱出のあり得るかも知れない契機を掴もうとするのである。しかし、先述のクラリッセの方はストレートにモースブルッガーにおいて現れる裸形の悪、狂気の創造力、いわばディオニュソス的なものに魅惑され、この性倒錯殺人者をニーチェ

とほとんど同一視し、且つまた自らをもニーチェと同一視するという妄想の世界の虜になってゆく。

四つめは、ウルリヒの妹アガーテがこの兄との近親相姦的な愛の結合を霊と肉の神秘的な合一の夢として見る「夢」である。「或る夢」と題された習作部分は実際の作品の中への採用を断念されたが、『特性のない男』の詩的インパクトに満ちた原風景の一つである。以上、ムージルにおいて「夢」にかかわる4つのアスペクトを並べてみた。

他方ニーチェの方はどうか。ニーチェが「夢」について論じている箇所として目立つのは『人間的、あまりに人間的』第一部の13番アフォリズムで、まさしく「夢の論理」die Logik des Traumsという表題がつけられている。ここではいわば夢の生理学的な定義づけがなされると共に、夢のもつ未開人の心性との共通点がクローズアップされている。「論理」に反すると考えられる点ではいちおう否定的評価が下されたと見るべきだろう。しかし未開人の心性ということの指摘は、先のモースブルッガーの「闇の逆手としての明るさ」を連想させるものが有る。『悦ばしき知識』の中のアフォリズムでも「われわれ芸術家は夢を見ることを心得ている者である」として、内的世界における原因と結果とを逆転させて考えることを強調している。因にここには、善と悪との発生の系譜学的逆転の論じ方を想起させる、ニーチェの独特の論法が窺える。

ニーチェは他方で「夢」を大変肯定的な意味でも使っている。それは周知のように、アポロは夢の側であり、ディオニュソスは陶酔の側であるという対比を、芸術の中での両者の統合を論じた『音楽の精神からの、悲劇の誕生』で述べられていることである。ここでの「夢」とは、光の神性、アポロ的原理にしたがう予言的な、芸術的な意味、古代ギリシアにおける夢が考えられている。ムージルは、自分の考えた厳密性と魂との対立を単純化してアポロ的とディオニュソス的との対立に引き較べているところがあるが、ニーチェに於いてもアポロにはいわゆる「個別化の原理」＝「論理」であるという面も添えられていることからすると、ムージルの理解も当たってはいなくはないことになる。

ついでに言及しておく、この『悲劇の誕生』に約15年後に付け加えられた「自己批判の試み」という序文から、ムージルはディオニュソス的妄想は「健康から来る神経症 Neurose aus der Gesundheit」ではなかろうかという一句を引き出して来て、あのクラリッセの口から言わせることによって、彼女にとっての自己了解の一種の呪文に仕立てている。それは、クラリッセに言わせることによってニーチェ思想のカリカチュアを意図するのみでなく、この序文に込

められたニーチェの思想のクゥイントエッセンスに立ち向かう主人公ウルリヒにも自己存在の究極を問い掛ける基本的な手がかりを意味することでもある。そのような構成でムージルの小説は成り立ってゆく。さらに、かの有名な「世界の存在は---現存在と世界とは---ただただ美的現象としてのみ正当化される」という一句も、小説の中で、クラリッセの愛用する格言とされてしまうと、一見、ニーチェの思想世界はクラリッセの妄想世界に逆様に映じたもの以上ではないかのような錯覚を呼び覚ましかねない面がある。おなじくニーチェがここに述べている最も深刻な思想、「科学を芸術家の視点 Optik のもとに見るが、芸術はしかし生の Optik のもとに見る」という問題は、ムージルにとってどういう意味合いで受容されたかは、なお問われねばならない。ムージルの日記の一節には、ウルイリヒの前身である Anders の主要問題の一つは「絶対的な芸術に対しての関係である」という書き込みがあるが、作家ムージルにも、倫理 Ethik を美学 Ästhetik の相のもとに見る、という問題設定があることをここで触れておく。

「夢」との関連で多少触れておきたいことは、言うまでもなく、ニーチェが死去した1900年に主著『夢解釈』が出版された S. フロイトのことである。フロイトは同書の中で前述の『人間的、あまりに人間的』からのアフォリズムを引用してフロイトの無意識論の淵源の一つはニーチェにあり、また、そこからする価値の否定などもニーチェから発想をかなりの部分得て来ているのではないかということは、今日すでに当然視されてもいることだが、ムージルに関しても、彼はニーチェの影響下での自分の心理学的発見および認識がフロイトの説にあまりに近いことが判明であるがために、意識的にフロイトに近づかないことに固執しつづけていた節がある。精神分析の理論的な整合性に強く惹きつけられつつも、いわば文学的に抵抗したと言えるだろう。前述の「マイナス変数」への関心はほとんど全てフロイトの術語コンテクストから理解可能なのである<sup>9)</sup>。

以上、「夢」というテーマによって、ムージルとニーチェとの接点らしきものを取り出すことが出来たと思われるとともに、『特性のない男』に出てくる4人の主要人物、ウルリヒ、アガーテ、クラリッセ、モースブルッガーの組み合わせが紹介できた。中でもこの作品に於いて最もラジカルな意味で文学的創造性、イメージ的強度を備え、「最高のモメント」(C. マグリス<sup>10)</sup>)を作り出しているのは、まことに逆説的にも、クラリッセと、モースブルッガーという二人の例外人物・特異人物を廻っての描写の部分にあるという考え方が、最近



のミュージル研究でかなりのウェイトをもった共通認識になっていると言っても過言ではない。先述したC. マグリスなどもその一人に数えられる。

#### (四)

ミュージルのニーチェ受容がどの程度の正当性を持ち、また、どの程度の強度において評価されるのかをトータルに考察することはかなり困難なことであるが、すくなくとも文学作品として限って考えた場合には、どういう詩的喚起力のあるテキストが成立しているのかという一点から見ていってよいだろう。ニーチェが考えた破壊的創造としての狂気、非理性の文学的形姿がこの二人の人物である。彼らは破壊的創造性をテキストに織り込んでゆく働きをする、もう一步進めて言えば、そういうテキストを作り出すように作者ミュージルに強制をかけている、と言えるだろうし、逆に見れば、この特異な二人の人物を描いているのはほかならぬ作者ミュージルであり、彼らの(文学的)存在は彼の創作力に依拠している、と言えるだろう。そして、いずれもニーチェの否定的側面を体しているとまずは考えられる二人の狂的人物を描く作者＝テキストが、さらにニーチェの思想ないし精神に導かれているという多層性において理解してゆく必要がある。そこでのニーチェは、もろもろの前提を廃棄した彼方に可能であろう認識へ向けて鞭を揮うニーチェである。「身体はひとつの大なる理性である」という『ツァラトウストラ』にある有名は反形而上学的な警句が想起されるが、そこに象徴的に言い表されている、理性・精神と身体・情動との逆転の遠近法は、ニーチェの思考法の定数と言える。認識行為というより認識メカニズム、認識機序を、一方のニーチェは「道徳的、宗教的美学的表象や感覚の化学 Chemie」という言い方で『人間的、あまりに人間的』の或るアフォーリズムで述べているし、他方のミュージルはそれに似たような「感情の、感ずることの数学」という表現を使っていて、さらに、ニーチェを「道徳 Moral の数学についての我々の教師だ」と呼んでもいる。知性と感性が、精神的なものや身体的なものが同時的に、或る意味では逆転した関係で協働する psychosomatisch な認識の力を期待する点で両者には共通する点がある。そこには、非啓蒙的な野蛮に陥る危険性が指摘されるところでもあるが(J. ハーバーマスら)、非理性を通り抜けての理性、という一種冒険的で実験的な観点はニーチェにおいても脱落しているわけではない。同じことはより小さな規模ながらミュージルにも当てはまる。そのようなラジカルな理性懐疑、主体解体は今日のポスト構造主義の思想家たちに受け継がれている。

余談になるのを承知で付言すると、そのポスト構造主義の、ニーチェを新たに読解した一人にミシェル・フーコーがいるが、そのフーコーをモデルにしたフランス作家による小説があるそうである<sup>11)</sup>。未読ながら紹介文によると、その主人公の名前はムージルをフランス語読みしたくミュージール>であって、小説中のその人物はみずからも、ニーチェに因む、『特性のない男』の如き小説を構想しているという設定となっているそうである。ニーチェを読むフーコーがモデルとして名前もミュージールとなり、ムージルの<ニーチェ小説>をイメージしながら別の<一つのニーチェ小説>を書こうとしている、という意味の重層性、多様な照応関係が窺える。つまり、ニーチェ的意識、ニーチェ的身体が小説空間を作り出す、というまた別の例証なのである。

以上のように、二人の否定的な人物に重点をおいて述べて来たが、それは彼らが『特性のない男』という小説の中に重要な位置を占めるからばかりでなく、この小説の発生史の原点から存在して、小説の展開の原動力的な働きをするファクターの意味をもつからであり、この発生史のはじまりと若き日のムージルの真摯なニーチェ受容とが軌を一にしているからからである。

1898年、18歳のとき、ニーチェ作品と衝撃的な出会いを経験したムージルは文学的出発点にあたり、多くの指摘があるように、ニーチェの「精神の生理学者や生体解剖学者たち」という語句（『道徳の系譜学』第三論文四節）などがヒントになったのであらうと思われる、「生体解剖氏」monsieur le vivisecteurという小説を構想し、他方、主にニーチェの『道徳の系譜額』と『ワーグナーの場合』からの抜き書きを行う中で、ニーチェの下したデカダンス診断を文化批判としてもっとも深刻に受け止めつつ、現象の奥にある背後存在 Hinterexistenz を探り当てべく色々な言語を駆使することを開始する。この二つのニーチェ受容に加えて、忘れてはならないのは、特に『人間的、あまりに人間的』などの著作を通じての文化批判、時代認識の方式とその表現様式が、ムージルの手に入ったということである。

そのころの構想の核の一つには、痴情殺人者モースブルッガーの前身であるような人物が、日記の断片の中に、あれこれと名前や姿を変えつつ現れて来る。それは、ムージル自身の分身でもあり、そのことによって後年の「特性のない男」ウルリヒの中にも幾分かは流れ込む要素を含み持つ人物でもある。そしてもう一人、クラリッセのモデルになった、友人の妻である Alice Donath という名の、当時のニーチェ流行に心酔し、フロイトの症例研究にある如き、性的な意味でのヒステリックな狂的な状態に陥ってゆく女性を直に眼前にする経験

をもち、若き日のムージルは彼の驚きの気持ちをはっきりと伝わるような表現で克明な観察記録を多数書いている。ニーチェの『この人を見よ』は、公開を渋る周囲の事情が絡まって1908年になってようやく刊行されるにいたるが、ムージルはやや後の1911年に偶々それを読んで、ニーチェの狂気に近いまでもの自己顕示に満ちたこの書の言説と、アリスの誇大妄想的な発言や行動とのあまりにも驚くべき一致に、心の底から揺さぶられる思いを経験する。このアリスをモデルにした小説のクラリッセはニーチェ心酔者として描かれ、ニーチェのさまざまなイデーの断片を播き散らすように発言をかさねる。たとえば、犯罪、悪、天才、救済、音楽、芸術、強さのペシミズム、病と健康（クラリッセはく健康の島へ赴く）、記号の遊び、さらに、自分の狂気とニーチェの狂気を正当化するような、「狂気のもつ創造性」などといったタームである。ムージルは、『この人を見よ』を初めて読んだ時に閃くごとく感じ取ったニーチェとアリスとの類似、パラレルな現象を見て、次のように書き留めている。

「彼女（アリス）はまるでカリカチュアのように文字どおりニーチェの個人的認識や処方に従って生きているのだ。しかし、別の言葉で言えば、彼女のおかしげな言動の中にもひょっとするとニーチェにもあると同じ真剣さ Ernst が潜んでいる。ニーチェは、その Ernst に対して滑稽ではない表現を見出したところがアリスとはちがっているのだ。それでも思考の端緒はどちらも同じだ。それにそれらの思考も身体的条件から由来するものであることも同じだ。」<sup>12)</sup>

もう一人の狂人モースブルッガーにとっても言語は事物と始源的な一体性をもったものであり、彼は、事物が即、言語であるという世界像を狂った脳の中に棲まわせている。言語は彼にとっては、外部に在るのであり、他者の言語は彼には支配の言語である。他者の言語の拒否、そして身体による事物との交流（Moosbrugger tanzt. の章）によってモースブルッガーは---幻視の世界---では言語の支配を、論理や理性の支配を免れることになる。ニーチェが狂気というものに一種の積極性を持たせ、肯定面を見ようとしたことはよく知られている。『曙光』の第14アフォリズムは、「道德の歴史における狂気の意義」というタイトルをもち、「新しい思想に道を開き、崇敬されていた慣習や迷信の束縛を打破するのは、ほとんど至るところで狂気なのだ。」「何らかの倫理性の桎梏をやぶり、新しい法を与える卓越した人々は（中略）、実際に狂人でないとしたら、自分を狂気にするか狂気のふりをするしかほかに方途がなかった。」などの文言を含んでいる。

「狂気」をすぐにニーチェのいう理性批判と結びつけるのは確かに強引すぎようが、理性がいつしか制度化してしまい、全能のパースペクティヴを僭称しかねない時に、反理性的なものを、つまり狂気に潜むものに類した「反理性」を対置して、そこからまた理性を問うというダイナミズムをニーチェは常に抱え込んでいたのではないかと思われる。狂ったクラリッセの中にニーチェに通ずる真剣さ Ernst を見ようとしたムージルは、存在の、実存のもっともシリアスな側面に身を曝して生きるアリス-クラリッセを表現上のことだけでなく、認識上の手段としても重要視すべきことを心得ていたのである。

#### (五)

前述のごとく、膨大な遺稿を可能なかぎり忠実に再現した A. フリーゼによる1978年の新版『特性のない男』はあまりの錯綜のゆえに一見無際限であるかの観があるのを指して、C. マグリスは、それをこの作品の欠点とはせず、逆にこの版によってこそこの小説は初めて真の意味で「読める作品」となったと主張していたが、それはなるほど特異な読書を強いるとは言え、文学のテクスト性とは何かを経験させる読書なのである。その膨大な遺稿の中のおそらく三分の一近くを占めているのが、クラリッセという人物を、クラリッセを廻っての文学空間を造形せんとするムージルの実にさまざまな試みの軌跡である。ここに彼の文学的創造力の原点があることは確かだし、彼の文学を論じる時は、当然ながらこの原点を問うべきである。ムージルは、主人公ウルリヒを時代の「カオスの中に彷徨う、精神の乞食行」と書き留めているが、或る意味ではこの小説を読む我々もこの遺稿のカオスの中を同様に乞食行することになる、と言えるかもしれない。

言語のことについて、もう一点ぜひつけ加えたいことがあるが、それは、ムージル研究の極く初期段階の1954年の小さな論文の中で、K. ミーヒェルがこの大作を特異な言語・文体の面で捉え、

「この文体には存在 Sein の諸層のラジカルな混淆が映し出されている。」

「内容が文体の中に沈澱している。」

「言語の暗号的性格 Chiffrecharakter は、その完成においてはグロテスクなフェティシズムに転化する。ただただ仮借なき物化の力によってのみ言語は今日まだ人間的なものを語りうる。」

という定義を下していることである<sup>13)</sup>。ムージルの文学創造に現出した言語は少なくとも一面においてはこのような性質を備えている。通常の言語の媒介を

欠いた、事物のうごめいている捉えがたい現実に対して、言語が事物の代理的像であるという関係をいわば逆転させて、修辞学でいわれるような言語の一機能としての〈隠喩〉はなく、言語そのものを〈隠喩〉にしてしまっ、「内容が言語や文体に沈澱する」ようにするのである。ニーチェが、そのような意味合いで隠喩、メタファー、イメージなどの文体上の方法とし、つねに逆転を目指していたことと共通すると言える。ニーチェ研究家の青木隆嘉氏が M. ブランショの言う「外部」の概念に依拠しつつ、「テキストの外部を示すために、ニーチェのテキストは書かれている。それは、ことばが現にあることばになる前を、ことばになったあとのことばで語るテキストである<sup>14)</sup>。」としているのは、ニーチェの言語・文体・表現を考えてゆく上でまことに示唆的である。

ニーチェの言語観を考察することは、それだけでも大変な困難を伴うことであるし、今ここでの論考の範囲を越えることであるので、考察すべきと思われる要点のみに限って言及するに留めておきたい。ニーチェはよく知られているように、『道徳外の意味における真理と虚偽』と題する初期の言語批判・言語懐疑の側面と、『ツァラトゥストラ』にみられる言語肯定というか、言語の愉悅を謳う側面とがあるが、このようなニーチェの言語に関わる多様な営為 Arbeit an der Sprache を克明にやり遂げることによってこそ個々人は「現実の像を多層化する」のであり、それを文学の中でなしたのがムージルの『特性のない男』を中心とする全仕事であると言えるのである。

ムージルを論じるに当たってウルリヒと実妹アガーテとの愛の物語を抜かすことは片手落ちになるだろう。しかし少々乱暴な見方をすると、この両者のペアは、モースブルッガーとクラリッセの対の裏返しであり、ムージル自身が一篇の詩にもしている、あの「イシスとオシリス」の両性具有的な神話をイメージした、神話形成による文学的解決法であったと理解してもよいのではないか。遺稿の中に、狂ったクラリッセが自分の中に両性具有性を意識し、その観念に引っ張られてゆくという一節があるが、Androgyn、Hermaphrodit のモチーフ、ウルリヒ／アガーテにとっても極めて強度なつながりを持つこの思いつきを、ムージルは「叙述の極めて有り難いモチーフである」 dankbarste Motiv der Darstellung と書いている。

ニーチェの女性観、性愛観はよく指摘されるようになりかなり否定的なものであるが、言葉で表されたのとは別の、ニーチェ自身の生活の言い表されなかった部分に潜むであろう真実を考慮に入れたり、ニーチェにとっては解きがたさと

してある女性の「他者性」、決定不可能性を捉えてより深く考察すべきであろう。その身体論や根源的エネルギーたる性愛に関してのニーチェの数多いアフォリズムも合わせて考える必要がある。女性の出産と芸術の産出とを同時に考える思考法がそこに在るからである。「真理は女である」(『善悪の彼岸』冒頭)とは、逆説的に言われた比喩のごとくであるが、ニーチェにとって解きがたい「他者性」として女性があるとすれば、ムージルにおいて神話的存在として呼び出された、ウルリヒの「もう一人の私」たるアガーテと彼との両性具有性と通底することになる。遺稿部分でウルリヒは、自分とアガーテとく別な状態〈der andere Zustandとを「私たち三人」と呼んでいる。〈別な状態〉とはこの小説において、現実を変えるべく要請された、そこから新しい意味が生じてくるであろうとされた、非現実な仮説的な状態であって、ムージルその人によって数学における虚数の働きに擬えられる。それは倫理的な意味を持つだけでなく、美的状態・美的経験を表してもおり、小説を引き上げる到達点となっている。ニーチェにおける芸術の位置づけを思い起こす必要がある。そのようなところに文学の持つ「転倒」の力、インパクトが存するのである。

#### (六)

さて、「ニーチェ小説」と言いながら、ニーチェの思想を盛り込んだわけではないし、ニーチェその人をモデルにしたわけでもない。それでも W. ミュラー＝フンクが言うように、『特性のない男』の「隠れた」主人公は、マンの『ファウストゥス博士』と同様、ニーチェである<sup>15)</sup>、とする見解は大方の研究者の諾うところであろうし、ウルリヒの生き方の一部はニーチェのそれを象ったところがあるとも言えよう。ムージルに於いては、意味の発見・創出へ向けて価値転換を志向する「自由精神」freier Geistが一貫した指導原理である。「自由精神」は一種破壊的に作用する。

「自由の道。(・・・)さまざまな価値評価から出てくる、構築し・排除し・破壊する思考様式としての〈正義〉は、〈生そのものの至高の代表者〉である。」<sup>16)</sup>

注目されるのはニーチェが「自由精神」に、構築と破壊、破壊と〈正義〉とが同時的に生じる思考様式を見ている点である。このようなコンテクストで〈生そのものの思考の代表者〉である〈正義〉が言われていることは大きい。この断篇を引用している G. ピヒトは、「〈責任性〉や〈責任〉と言うときにニーチェが考えている地平は、〈人類の全体意識〉である」、と書いている<sup>17)</sup>。ピ

ヒトの言うところによれば、ニーチェの最終的に目指したのは、創造・ポイエーシスを行う〈芸術家〉としての〈将来の哲学者〉が抱くであろう〈人類の全体意識〉というものということになる。『善悪の彼岸』第61アフォリズムにある「最も広大な責任」とは、ウルリヒにおける「正しい生」の模索と呼応すると言えるであろう。

「ニーチェ小説」ということでムージルとニーチェを比較する場合、このテーマを扱う論考がすべて持ち出すように、また、それも多くは肯定的な意味で考えているように、例の「実験」、「可能性感覚」、「可能性人間」、「エッセイイズム」、「パースペクティヴィズム」などのタームに言及しておかなくてはなるまい。「特性を持たないこと」という概念すらもニーチェからの示唆であるという指摘もある。それらはいずれも、真理の相対性や現実・現象の多層性を先行させる思考法、合理的な体系思考への批判、価値・倫理の無根拠性と新たな創出の可能性の模索、などといった精神態度にかかわっている。生涯の伴侶のごとくニーチェの主要作品の殆どを読みついでムージルはそのような思想にどっぷりと漬かっていたとも言える。

もちろんニーチェを批判的に見たり、その影響圏を脱しようと試みている点も入念に見分けてゆかねばなるまい。たとえばニーチェの主著とされる『ツァラトストラ』には決定的な距離をおいている。ただし、興味深いのは、ムージルの日記での最初の密かなニーチェ引用が『ツァラトストラ』の末尾に近く現れて歌う老魔術師の詩のなかの「道化にすぎぬ！詩人に過ぎぬ！Nur Narr! Nur Dichter!」であることである。さらにそれを口にするのが、ウルリヒの前身の一人としても考えられ、やがてモースブルッガー像に結実してゆく、「昨日絞首刑にされた少女殺人者」である点である<sup>18)</sup>。ムージルは後年、一種の諦念をこめつつこの一句をまた書き留めているが、ニーチェにおいては、「道化」は自己戯画化の思想的タームであって、「笑い」「仮面」や「戯れ」と関連して、すでに意味の構築をも突き抜けようとする思想営為を表している。そしてそれは「文学」のありようと深く関わってくることになる。

ムージルの若い時の日記には、ニーチェからの抜き書きとして「真理というものがあるのではなく、多数の真理があるのだ」という一句があるが、これはニーチェの後期の思想を書き留めた遺稿群のなかに無数にある似たような発言のひとつである。そこには様々な表現を用いながら、真理の多数性、解釈の優位性、パースペクティヴィズム、精神に対する情動的な「力への意志」の普遍性などが述べられている。早い時期からムージルはそのような思想に馴染んだ

と言うことになる。彼の「エッセイイズム」とニーチェの「パースペクティヴィズム」とは、いずれも固定された形而上学的な根本概念を解体することに向けられるものと考えてよいが、ムージル論においてこの比較検討はすでに充分になされている観があるので、改めてここで論究するには及ばないであろう。

新しい知見としては、Ch. ドレスラー＝ブルツメがムージルの「私にとっては、形式がすでに内容である」という言葉を引用して、エッセイイズムの方法を美学的原理としても捉え、これに関連してニーチェの次のアフォリズムを紹介していることが挙げられる<sup>19)</sup>。

「人は、すべての非芸術家が<形式>と呼ぶものを<内容>として、<事象そのもの>として感じるということによって、芸術家たりうる。……一種の倒錯した世界……、なぜなら、これからは内容というものが何か単なる形骸となるからだ、---我々の生も含めて。」<sup>20)</sup>

ムージルが、表現形式こそ内容である、今日芸術にとって was よりも wie が肝要である、私の成したことは Gestaltung である、などと言っていることの意味はこういうことなのであり、彼の作品の（見かけとは逆の）性格の根拠でもある。

また別の知見としては、W. ルツェハクが「ニーチェにおける身体の優位の下でのエトスと、ムージルの精神の優位の下でのエトス」と対比して考察しているものであるが、この二元論はこのままでは納得できない<sup>21)</sup>。なんとなれば、ムージルに於いても、人間存在が身体において捉えられている（とりわけ、文学表現としての強度をそなえた、クラリッセやモースブルッガーの造形）し、心情や心理が中核に置かれているからである。また、W. ミュラー＝フンクがそのエッセイイズムの理論と歴史を述べた著作の中でムージルのそれをキーワードの一つにしていることも挙げられる。W. ミュラー＝フンクは、エッセイ・エッセイイズムを<現代>の思考方式・表現方式と位置づけようとして、その16の特徴を纏めているが、その最後に「美的理論」としてのエッセイイズムの特徴を挙げている。そこでは「美的なものが主題としてあるのではなく、理論の一つの特質」と化している、とするのである<sup>22)</sup>。言語という媒体を通じての、ムージルやカフカやジョイスなどといった現代の文学作品が提供する美的経験こそが、今日思考を押し進めるものである、ということになる。

すでに触れたように、ムージルは、ニーチェが『悲劇の誕生』に埋め込んだ、「世界の存在は---現存在と世界とは---ただただ美的現象としてのみ正当化される」という「暗示的な命題」を、あの狂気のクラリッセの口から言わせていた



のであるが、この著に加えられたほぼ晩年（1886年）の序文「自己批判の試み」には、その命題に呼応するかのよう、「科学を芸術家の視点 Optik のもとに見るが、芸術はしかし生の Optik のもとに見る。」という重要な一句が存在する。これは周知の如く、ハイデッガーが彼のニーチェ哲学理解の根底に据えた思考の一つである。クラリッセにあっては、この一句は、世紀転換期の知的雰囲気を反映する面のある、〈芸術のための芸術〉や〈美のために美〉などの文化的コンテキストで引用されるのだが、そこに狂者による引用であることによってこの命題に生じる〈転倒〉は、主人公ウルリヒをして〈転倒〉のさらなる〈転倒〉を思考させることになる。ウルリヒにとってのクラリッセの意味の一つは、つねにこのような見方・思考を促すところにあると言えよう。その〈転倒〉は、「真理とは、存在者が存在するために必要とする〈虚偽〉〈錯覚〉にすぎない」とするニーチェの根本テーゼにおける転倒と、どこか見合うことになろう。

ジャック・デリダはそのニーチェ論で、「テキスト-ニーチェ texte-Nietzsche の未来は未だ閉じられてはいない」という表現で、ニーチェのテキスト／思惟が今日なお創造性をたもっていることを示したが<sup>23)</sup>、これに倣って言えば、遺稿部分を加えたムージルの『特性のない男』のテキストの未来もまだ閉じられてはいないのである。デリダは、今日の時代における思考の文学的形式を哲学の上に置いた。クリストファー・ノリスは、主にアメリカ合衆国でかつて行われていたような意味での「ディコンストラクション」の無制限な反哲学的な文学優位説をたしなめつつ、デリダの主張を次の点に見る。

「哲学は（そして思考一般は）、詩人が言語に向けるような整然とした意識をもたないかぎり、十全の意味で自己批判的なかたちでは行ないえない。」

「（ニーチェは、）哲学は真理探究であるという主導的な思潮に対抗して、隠喩、文体、エクリチュールなどのテキスト的資源を用いた。」<sup>24)</sup>

われわれは、このようなニーチェ理解を援用することによって、ムージル文学をその核心に於いてよりよく把握してゆくことができるであろう。

〈了〉 （2000-10-3）

※本稿は、1999年11月20日／21日開催の第52回日本独文学会西日本支部学会における「ニーチェ・シンポジウム」での発表論文を基にし加筆したものである。

<註>

- 1) Claudio Magris: *Hinter dieser Unendlichkeit -- Die Odyssee des Robert Musil*. In: G. Brokoph-Mauch (hrsg.): *Beiträge zur Musil-Kritik*. Bern 1983, S. 60
- 2) D. Heyd: *Musil-Lektüre: der Text, das Unbewußte*. Frankfurt a.M. 1980, S.136
- 3) Hermut Arntzen: *Satirischer Stil. Zur Satire Robert Musils im >Mann ohne Eigenschaften<*. Bonn, 1970. そのアルンツェンも1983年刊の *Zur Sprache kommen* の中の講演論文 *Sprache und Sprechen in Musils >Der Mann ohne Eigenschaften<* (S.266-S.278) では、この小説における言語とその裏返しの言語喪失とに着目している。
- 4) Bruno Hillebrand: *Nietzsche und die deutsche Literatur*. Bd.1 Einführung. Tübingen 1978, S.45
- 5) ゲオルク・ピヒト: 『ニーチェ』(青木隆嘉 訳) 1991年 法政大学出版局, 35頁
- 6) B. Hillebrand: *a.a.O.*, S. 49
- 7) Ingo Seidler: *Das Nietzschebild Robert Musils*. In: *DVjS* 39, 1965, S.329 - S.349, jetzt in: B.Hillebrand: *Nietzsche und die deutsche Literatur*, Bd. 2. S.160 -S.185
- 8) Theo Meyer: *Nietzsche und die Kunst*. Tübingen & Basel 1993, S.424
- 9) W. ミュラー=フンクが言うように、ムージルの『特性のない男』はいろいろな意味で、「フロイトへの平行運動 Parallelaktion である。」 W. Müller-Funk: *Erfahrung und Experiment -- Studien zu Theorie und Geschichte des Essayismus*. Berlin 1995, S. 188
- 10) Claudio Magris: *a.a.O.*, S. 61
- 11) ジェイムズ・ミラー: 『ミシェル・フーコー/情熱と受苦』(田村 俣ほか 訳) 1998年 筑摩書房, 387頁
- 12) Robert Musil: *Tagebücher*, Bd.1, hrsg.v. Adolf Frisé, Hamburg 1976, S.251
- 13) Karl M. Michel: *Utopie der Sprache*. In: *Akzente*, Bd. 1 (1954) S.23~S.35
- 14) 青木隆嘉: 『ニーチェと政治』 1993年 世界思想社, 4頁
- 15) Wolfgang Müller-Funk: *a.a.O.*, S.162, Anm. 403
- 16) Nietzsche: *Sämtliche Werke*.(KSA), München 1980, Bd.11 S.140f.
- 17) ゲオルク・ピヒト: 同書, 458頁および469頁
- 18) Robert Musil: *Tagebücher*, Bd.1, S.7
- 19) Charlotte Dresler-Brumme: *Nietzsches Philosophie in Musils Roman >Der Mann ohne Eigenschaften<*. Frankfurt a.M. 1987, S.55
- 20) Nietzsche: *Sämtliche Werke*.(KSA), München 1980, Bd.12 S.55. (Schlech-

ta III S.691)

- 21) Wolfgang Rzehak: *Musil und Nietzsche: Beziehungen der Erkenntnisperspektiven*. Frankfurt a.M. et.al 1993, S.223~S.232
- 22) W. Müller-Funk: *a.a.O.*, S.287
- 23) Jacques Derrida: *Autobiographies. L'Enseignement de Nietzsche et la politique du nom propre*. Paris 1984, S.98, zitiert in: Peter V. Zima: *Die Dekonstruktion*. Tübingen & Basel 2000, S.48
- 24) クリストファー・ノリス: 『デコンストラクション』(富山/篠崎 訳) 1995年 岩波書店, 17頁および196頁